

ルカによる福音書24章13-35節 「再び燃える心」

1A 失望した心 13-24

2A イエスに戻す 25-33

1B 聖書の解き明かし 25-27

2B 聖餐 28-35

本文

私たちの修養会のテーマの箇所、ルカによる福音書 24 章 13-35 節を読みたいと思います。イエス様の復活後、エマオという村に歩いていた二人の弟子の話を読みたいと思います。説教題を付けるならば、「再び燃える心」です。32 節にあります、二人は互いに話しています、「道々お話しになっている間も、聖書を説明してくださった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」心が燃えている、その燃える心が与えられた弟子たちから、私たちがいかにこの心を取り戻すことができるのか、また維持することができるのかを考えます。

皆さんがイエス様を信じたのは、いつぐらい前になるでしょうか？それぞれですが、その歩みの中で「そのはずではなかった」というような出来事がおありになったと思います。これが、神の御心だと思っていたのに、まるで異なる状況の中に置かれてしまったと思ったことがないでしょうか？私はありました。何度もありました。今は、神の恵みによって、そのようなことが起こる度に、「主が何かを今、ここでしておられるはずだ」と信じるができるようになっていきます。それでも、自分があまり想像を超えてしまったもの、想定外のことが起こると、がっかりします。「このはずだったのに…」という期待外れ、これがこの弟子二人が経験したことでした。では、13-24 節までを一気に読んでみましょう。

1A 失望した心 13-24

24:13 ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。24:14 そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。24:15 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。24:16 しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。24:17 イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。24:18 クレオパというほうが答えて言った。「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」24:19 イエスが、「どんな事ですか。」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。24:20 それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。24:21 しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そ

ればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、24:22 また仲間の女たちが私たちを驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみました。24:23 イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。24:24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」

今、弟子二人が歩いているのは、エマオという村に向かってであります。エルサレムから約11キロメートル離れたところです。働いてはいけなさと命じられている安息日には、3,4キロしか歩けないことになっていました。ですから、この弟子たちは自分の家のある村に戻りたかったのですが、イエス様が死なれて、葬られたとは安息日の直前です。安息日を待って、それから夜が明けた日曜日に、自分たちの家に向かって歩いていったのです。

15節には、その返る途中で、「話し合ったり、論じ合ったりしている」とありますね。イエス様についていて、エルサレムで十字架に付けられた一部始終を話し合ったり、論じあっています。そして、彼らは17節に「暗い顔つきになって、立ち止まった。」とあります。皆さんはもちろん、話し合ったり、論じあったりすることがあると思います。とかく、その話が暗いものになりますね。私は若い時、「朝まで生テレビ」を見たことがあります。すぐに止めました。解決が見えないばかりか、問題がさらに大きくなるのを感じたからです。彼らも同じでした。死んでしまったイエス様について話しているのですから、希望もへったくれもありません。そして、「イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。」とあります。面白い姿です。イエス様について話し合ったり、論じ合ったりしているのですが、ご本人がそれを聞きながら歩いておられます。

そして、こここの箇所でもとても大事なのが、16節、「ふたりの目はさえぎられていて、イエスだとわからなかった。」というところです。彼らはイエス様であるとは分かりませんでした。福音書には、このように復活後のイエス様を初めは分からないでいる状態が書かれています。マグダラのマリヤも、初めは園の番人だと思っていました。「マリヤ。(ヨハネ 20:16)」と声をかけられたら、それでイエス様だと分かりました。マルコ 16章 12節には、「」と書いています。別の姿というのがどういう姿だったのか、いろいろな意見があります。いずれにしても、主が肉体をもって復活したことは確かです。

しかし、ここで「目が遮られていた」というのは、肉眼のことではありません。彼らはイエス様を見ていました。けれども、霊的な目が遮られていたのでイエスだと分かりませんでした。なぜ遮られていたかという、イエスが死んでしまった、私たちはこの方こそイスラエルを救ってください、贖ってくださいと思っていたのに、死んでしまったと失望していたからです。

私たちは、何か、自分たちの期待通りになっていない現状を見る時に、そこで信仰をもって、「それでも、主がここにおられる。」という立場を取ります。ちょうど、それは目隠しをしているけれども、

必ず自分のところにはこの人がいる、と信じるのと似ています。そのように信じれば、目が見えていなくとも、人の気配がし、話しかけると語ってくれるので、「確かにここに人がいるのだ」と理解することができます。けれども、信仰を持っていないと、「もう、主が私たちから離れてしまったのだ。」と判断してしまうのです。すると、心の目までが閉ざされてしまい、そこに落胆した思いのみが残るのです。

二人の弟子が期待していたものは、次の通りです。当時のユダヤ人たちは、ローマ帝国の支配下に生きていました。彼らは、紀元前 586 年のバビロンの捕囚によって国を奪われてから、ずっと異邦人の国の支配下に生きていました。ペルシヤがバビロンを打倒して、ユダヤ人はエルサレムに 70 年後に帰還することができましたが、ペルシヤの支配の中にいました。ペルシヤの次はギリシヤが支配しました。ギリシヤ時代に、ユダヤ教徒たちは激しい迫害を受けました。そうこうしているうちにローマが支配しました。そしてイスラエルの地域は、ローマに媚びるヘロデという男が、ユダヤ人の王として支配するようになったのです。その虐げは、時を経ればそれだけ酷くなってきました。異邦人の支配によって自分たちが押しつぶされそうになっている、とっていました。しかし、彼らは期待をかけたのです。聖書には、そうした異邦人の支配からイスラエルの民を救われる方が来られることを預言していたからです。キリストが来られて、イスラエルを救われ、そして神の国を立てられることを神は約束しておられました。

例えば、彼らはどのような約束を見ていたか、読んでみたいと思います。ミカ書 5 章 2-9 節を読みましょう。「2 ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。3 それゆえ、産婦が子を産む時まで、彼らはそのままにしておかれる。彼の兄弟のほかの者はイスラエルの子らのもとに帰るようになる。4 彼は立って、主の力と、彼の神、主の御名の威光によって群れを飼い、彼らは安らかに住まう。今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。5 平和は次のようにして来る。アッシリヤが私たちの国に来て、私たちの宮殿を踏みじるとき、私たちはこれに対して七人の牧者と八人の指導者を立てる。6 彼らはアッシリヤの地を剣で、ニムロデの地を抜き身の剣で飼いならす。アッシリヤが私たちの国に来、私たちの領土に踏み込んで来たとき、彼は、私たちをアッシリヤから救う。7 そのとき、ヤコブの残りの者は、多くの国々の民のただ中で、主から降りる露、青草に降り注ぐ夕立のようだ。彼らは人に望みをおかず、人の子らに期待をかけない。8 ヤコブの残りの者は異邦の民の中、多くの国々の民のただ中で、森の獣の中の獅子、羊の群れの中の若い獅子のようだ。通り過ぎては踏みじり、引き裂いては、一つも、のがさない。9 あなたの手を仇に向けて上げると、あなたの敵はみな、断ち滅ぼされる。」いかがでしょうか、メシヤすなわちキリストがベツレヘムから現れて、虐げている異邦の国々を力をもって踏みじり、断ち滅ぼしてくださるという約束なのです。

その中で、イエスが来られました。この方が、旧約聖書の中で行なうと約束していた奇跡やしるしを行なっておられました。「イザヤ 35:5-6 そのとき、盲人の目は開かれ、耳しいた者の耳はあけ

られる。そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。」弟子たちは、この方こそキリストに違いないと思っていました。そして、イエス様はエルサレムに向かわれました。エルサレムに入られて、そして主がローマの支配を打ち砕かれて、それでそこから神の国を支配されると期待していたのです。

ところが、イエス様はご自分の民、ユダヤ人の指導者から捨てられました。そして、ローマに反逆しているという罪で、ローマに屈服する象徴であった、十字架刑に処せられたのです。ローマの力を打ち砕かれる、その奇跡の力によって砕かれると信じていたのに、かえってローマの力によって虐げられました。それで、彼らは主に従うのをやめてしまいました。それが、エルサレムからエマオの村に帰ろうとしたことの経緯なのです。このように一度、「もうこれで終わりだ」と決めてしまうと、心を堅くしてしまいます。それで、24 節で、甦られたことを女たちが話しても、心が頑なになっているので、その声が聞き取れず、鈍くなっています。

2A イエスに戻す 25-33

しかし、二人の弟子はイエス様が死なれたことによって、心を頑なにしてしまいました。死んでそれでイエスはいなくなった、と決めてしまったからです。そこから、イエス様はどう彼らを回復させるのでしょうか？イエス様はこれから、弟子たちの心をご自分のところに取り戻されます。それは、「聖書の解き明かし」からでした。

1B 聖書の解き明かし 25-27

24:25 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。24:26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

イエスご自身が、イエスご自身について旧約聖書から語られています。主は何度となく、ユダヤ人たちに対して、旧約聖書はご自身を証しているものだと言われました。「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」私たちは、イエス・キリストを知るのにこの分厚い聖書の中で福音書しかないと思ったら、大間違いです。イエス様は山上の垂訓では、「マタイ 5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」と言われました。イエス様こそが、旧約聖書の中心なのです。したがって、神は二千年近くの歳月をかけて、何十人もの者たちに啓示を与え、このイエスが誰なのかを時代を追って少しずつ示していかれたのです。「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。(ヘブル 1:1-2)」

ここで主が強調されているのは、「すべて」という言葉です。25 節にも、27 節にも、「すべての預言者」そして「聖書全体の中で」と、全てを強調しています。弟子たちは、聖書は信じていたのです。信じていなかったのではありません。問題は、全てを信じていなかったのです。ここが大きな違いですね、全てを信じるというのは、創世記から黙示録までに啓示されている、神のご計画全体に自分を精通させることに他なりません。パウロは、このことのために労苦しました。「使徒 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」どこかを信じて、それで終わりではないのです。全てに渡ってそれが神の言葉であり、その全体を信じることによって、自分は良き神の働き人として整えられます。「2テモテ 3:16-17 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」

ここでイエス様が強調されたのは、弟子たちが信じていなかった部分です。「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて」ということです。彼らは、キリストが栄光に輝く主として、異邦人の国の力を滅ぼし、神の国を立てられるということは信じていました。しかし、それが、十字架のような苦しみを受けて、それから初めて栄光に入るということを信じていませんでした。しかし、聖書全体にはその流れがしっかりとあるのです。

主は、アダムが罪を犯してから、すぐにそのご計画が始まっています。「女の子孫」によって蛇の子孫の頭を打ち砕くと約束されました(創世記 3:16)。そして、アダムとエバに、皮の衣によって服を着させました。「3:21 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」つまり、彼らの罪から来る恥を覆うために、自分たちの行いではあく、神のくださる、血によるいけにえによって、その罪を赦すことをお決めになったのです。そして主はアブラハムのことを語られたでしょう。自分の愛する独り子イサクを捧げなさい、と主は命じられたのです。アブラハムは、彼に木を負わせて、そしてモリヤの山で彼をほふろうとしたのです(創世記 22 章)。そのモリヤの山の近くで主は十字架の木を負われ、そして十字架でつけられ、罪のためのいけにえとなりました。

それから主は、過越の祭りを語られたことでしょう。家の門柱と鴨居に子羊の血を付けて、その血を見た天使が、災いを過ぎ越すのです。「出エジプト 12:13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。」それでその家の男の子は神の裁きを受けないですみました。同じようにして、キリストは小羊のように血を流され、その血の中にいる私たちは、神の裁きを免れることができます。さらにイエス様は、モーセの律法にあるいけにえの制度を語られたことでしょう。旧約聖書を見ると、なぜここまで血が流されなければいけないのか、とても驚きます。当時は、屠殺場のような血なまぐさい臭いが、神殿の辺りを立ち込めていたことでしょう。なぜ神はそのようなことをされたのか？「ヘブル 9:22 血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」その犠牲の制度はすべて、罪の赦しのため、神に近づくために身代

わりのいけにえが必要であることを示していました。

これが律法に書かれていたこと、キリストの苦しみです。そして、イエス様は、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルなど、預言書をたくさん語られたことでしょう。イザヤの預言には処女からキリストが生まれること(7章)、そしてこの方が、「9:6 不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれることが書かれています。特に、イエス様に付いていったガリラヤ出身の弟子たちは、イザヤ 9 章の預言にわくわくしていたことでしょう。「9:1-5 しかし、苦しみのあつた所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照つた。あなたはその国民をふやし、その喜びをまし加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。」

これだけを読めば、ガリラヤからエルサレムに向かわれるイエス様を見て、クレオパともう一人の弟子のように、ローマを打倒して下さると思ってもおかしくありません。しかし、同じイザヤ書には、49 章から「主のしもべ」としてのキリストの姿があります。人と同じように学ぶ方であり、そしてそしられる方であり、そしてついに、屠られる小羊のように殺される方であることが書かれています。53 章がそれを克明に預言しました。「53:5-6 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」詩篇 22 篇は、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか。」という言葉から始まりますが、イエスが死なれる前に十字架上で叫んだ言葉です。そして、主がその骨々の関節が外れて、数えることができるほどだということまで書いてあります。さらに、着物をくじで分けられるということまで書いてあります。

そして、ダニエル書 9 章には、七十週が定められていて、七週と六十二週、すなわち 483 年後にメシヤが断たれ、とありますが、キリストが殺されることが預言されています。エルサレムを再建した時は 445 年ですが、それから 483 年後、計算すると大体、紀元後 30 年辺りになります。キリストが死なれる時期まで予告してあるのです。

2B 聖餐 28-35

このようなイエスが解き明かしをされている中で、彼らの心も変えられていました。

24:28 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。24:29 それ

で、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。24:30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。24:31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。24:32 そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

弟子たちのほうからイエスを引き止めました。イエスと離れたくない、いっしょに時間を過ごしたいのということです。ここに熱意があります。イエス様はユニークな方です。わざとエマオを通りすぎることによって、彼らの熱意を引きだされたのです。

そして、彼らの目を開かせた決定的な瞬間は、イエスがパンを取って、それを裂いて、渡されたところにあります。主との親しい食事の時間、このことを弟子たちはそれを最も親密な一時でありました。私たちはこのように、修養会、キャンプをしていますね。日頃キャンパスで会っている仲間であっても、共に食事をし、共にお風呂にはいり、そして同じ部屋で寝るからこそ、仲間のいびきで眠れない夜を過ごすとか(笑)。こういう時を過ごすから、いつもは見ることのできない互いを見ることができ、それで交わりが親しくなるのです。

そして、食事をするということは、当時は交わりそのものでありました。日本人にとって、それがなぜ交わりなのか分かりづらいかもしれません。日本語に「同じ釜の飯」というものがあります。同じ食べ物が互いの体の中に入っていく、それによってつながっている、一つとされている、というのが元々の意味なのです。ある韓国系の教会で起こった出来事です。礼拝後の昼食で、自分が盛った皿の食べ物が、目を離していたら、いつの間にか少なくなっています！誰かが取っていったんですね。それだけでなく、ある姉妹は、自ら自分の皿にあるものを他の兄弟姉妹に分け取ってしまい、自分のが少なくなっているのです。これぞ、「分かち合い」と言います。つまり、自分のものは他の人のものでもあるのです。これが交わりの意味です。

そして最後の晩さんでは、ご自身の流される血が、新しい契約のしるしであると言われました。それで初めて、目が開かれたのです。私たちが主と親しい交わりをする瞬間、その体と血にあずかる時、私たちは主のご臨在にあずかることができます。

そして彼らが互いに話すのです、主が語られ、聖書を説明しておられた時に、私たちの心は燃えていたと。それで、彼は主ご自身に目が開かれたと。十字架で死んで、それで終わりではなく、実はその十字架の延長で主の栄光があるのだと。このことを悟って、それで心が燃やされたのです。私たちに与えられているのは、この再調整です。主と共に歩んでいるつもりが、目が主から引き離されていた。それで、主がここにおられるのに、心はいつの間にか離れてしまっている。エルサレムとエマオとの距離は、まさに主がおられるところと私たちの心との距離なのです。

けれども、聖書の説明を聞いているうちに、主ご自身の臨在と、神のご計画全体を知らされることによって、私たちの堅くなっていく心はもう一度やわらかになり、心を燃やされています。私たちの周りでは、これから「神さま、一体なぜそうなるのですか？」というような出来事が数多く起こるでしょう。まるで神がおられないような、あるいは神が見捨ててしまったような、あるいは神が無力であるかのような出来事が起こります。世界でもそうですし、また自分の周りでも起こるでしょう。だから、神の救いのご計画の全体を知る必要があるのです。そうすれば、たとえ何かが分からないような時でも、それでご計画の全体を知っていれば、その時に対処する術を持っています。キリストにある希望を説明できる術を持っています。主がそれでもそこにおられるという、霊的な眼力を保っていることができます。

24:33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、
24:34 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。24:35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。

主が生きておられることを証しました。このことを、私たちも証します。キリストが形造られるところにある喜びです。私たちが弟子たちと同じように、主が生きておられることを互いに語り合い、分かち合う時に、そこに主ご自身がおられます。私たちが、このキャンプ場から離れる時に、主がそれでもおられるのだという喜びをもって、降りて行きたいと思います。